atonement

ぱろっともん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ａｔｏｎｅｍｅｎｔ

【Ｎコード】
Ｎ４５７２ＢＡ

【作者名】
ぱろっともん

【あらすじ】
青年天見翔（あまみしょう）は人を殺した後悔から自殺する。しかし天国にも地獄にも逝かず何故かデジタルワールドへ行ってしまう、彼はデジモンと出会いどう変わるのか。

第一話―自殺―（前書き）

第一話です。ダメ人間が書いています。読んでくださったら幸いです。

第一話―自殺―

プロローグ

足が地面から離れた。

伸ばした手は空を掻いて。

自分の体が墜ちていった。

自分に向けて叫んでいる声が聞こえる

泣き叫んでいるのが見える

その声も聞こえなくなった。

その姿も見えなくなった。

何も――何も――自分の伸ばした手すらも――――見えなくなった。

何も――何も――自分の叫び声すらも――――聞こえなくなった。

何も――何も――何も――何も――何もかもがなくなった――全てを否定された――

――存在ですらも――

私の名前は天見（あまみ）　翔（しょう）今から私は命を絶とうと思う。平たく言えば自殺しようとしている人に迷惑をかけたくないので、遺書よりわかりやすいようにこの映像を撮っています。
これは私の意思です、私は人を殺しました。正確には殺したも同然といった方が良いかもしれない。私の目の前で彼は崖から墜ちていった。私は助けられなかった。山に行くきっかけを作ったのも私、その崖道を通るように決めたのも私。私はその罪を償いたい。

彼、天見翔はカメラを停めた。
そして机の上においた大量の睡眠薬を少しずつ飲み込んだ。
彼はとてつもない眠気に襲われながら布団に入った。
彼の意識は闇の中に消えた。
その直前になって激しく後悔した。
死ぬ瞬間１が０に変わる瞬間彼は《生きたい》と切に願った

しかし意識は闇の中に――

第一話―自殺―（後書き）

かなり更新遅くなると思います。
不定期に更新するつもりです。

第二話二つの世界（前書き）

第一話があまりに短くてすみません。今回はデジモン出ます。

第二話二つの世界

私、天見翔は間違い無く死んだはずだった、

しかし感覚があるし意識もある、

暖かいものが上に乗っているのがわかる、跳ねているのもわかる。

「――――」

天国だろうか？

「――――ウ」

しかし私は人殺しだから天国にはいけないはずだ。

「――――――ョウ」

だとするとここは、いったいどこなのだろう？地獄とは思えない、

鳥のさえずりも聞こえる。天国でも地獄でもないならここは――――

「とっとと起きんか？」

殴られて思考は中断された、さっきまでとは違う声だ

「いつまで寝とるんじゃ？」

「殴られたいのか」

もうすでに殴られている。

「ショウ！！」

名前を呼ばれて初めて目を開けて振り向いて――

そこには小さなピンク色のタコの上に青色の南米辺りに咲いてそうな花が咲いている、目は緑色でとても澄んでいる、さらには嘴らしきものまである謎の生き物がいた。

少なくとも地球上の生き物ではないだろうそう判断するのに些かの躊躇もなかった。

嫌な予感がしたので自分を殴っただろうものの方を見ると――――

こちらも中々に珍妙といってよい人（？）がいた。

素足で目も口も鼻すらも見えないほどの白髪と白髭をたくわえボロボロの服を着て足にまで毛を生やし猫の手のような杖を持った人（？）がいた。

とりあえず敵意はなさそうなので（殴られたけど）疑問を口に出してみた「ここはどこで、あなた方は何者なのですか？」

「名を聞くなら自分から名乗らんかぁ？」怒られた。

さっきからショウと読んでいたから知ってるかと思っていた。

「私の名前――「オレはジジモン」割り込まれた、しかも一人称オレって「――ここはデジタルワールド、こいつはピョコモンじゃ」

でじたるわーるど？彼らの名前も大概変だがそれよりも気になる事だどうやら地球上ではないのは間違いないらしい。

その様子を察したのだろうピョコモンが口を開いた。「デジタルワールドはボクたちデジモンの世界だよ」

でじもん？

「――デジモンはデジタルモンスターのことで――」

でじたるもんすたー？電子的な怪物？

「――ボクはショウのパートナーなんだ」

パートナー？――相棒？知り合って間もないのに？

ジジモンが口をはさんできた「オレが説明しよう、ますここはお前の住んでいた世界ではない――」それは大方わかっている。「――お前たちの世界はリアルワールドと呼ばれている――」りあるわーるど？――現実世界？「――ここは０と１の狭間にある世界だ。そしてパートナーとは一部のデジモンだけが持っているものでパートナーを持つデジモンにはあらかじめパートナーのデータが刻み込まれている。わかったか？」

整理して考えてみることにした

「０と１の狭間」０と１というのはプログラム言語のことだろうか、となるとデジタルワールドはパソコン等の電化製品のネットワーク上にあることになる。だとするとピョコモンやジジモンは何らかの実行プログラムで「データが刻み込まれている」とはピョコモンと

いうプログラムを構成するデータに天見　翔というデータの一部が情報として組み込まれていると見て良いだろう。

この推論から導き出される答え――もとの世界に戻るには彼らの協力が必要だろう。（できないかもしれないが）、そして――ピョコモンには自分が必要なのだろうということ。

つまり

彼らと手を組む以外の手はない。

「・・・私は天見　翔です。よろしくお願いします。」

「なかなか聡いじゃないか、一つ言うとお前をリアルワールドに戻す方法はないぞ――」予想どうりだ――「今お前がここにいるのはオレが呼んだからじゃ――」ならば戻れる可能性は０ではないだろう――「何故呼んだかと言えば、世界を救うためじゃ！」そんな急にいわれてもどうすればいいんだよ――まぁ協力以外に無いのだが――「まぁ具体的に何をしてもらうかと言えば――旅に出てもらう。具体的にどんな危機に瀕しているかはわからない！」

・・・は？呼びつけといてわからないとは、

「よし、ショウ行こう！」

ピョコモンは何故納得できるのか？ワケガワカラナイ。

しかし行くしかないリアルワールドになるべく早めに戻りたい。

「じゃあ・・・行きましょうか。」

その刹那、地中から黄色い亀？が飛び出たのは認識した。その直後、体が中に浮くのを感じた。

ドサッ　　鈍い音ともに着地した。

しかし黄色い亀――妙に首が長いのと棘だらけの甲羅が気になるが――はもちろん待ってはくれなくて、大口を開けて迫っていた。

先程後ろにいたピョコモンは黄色い亀の眼前にいる。

立ちふさがっているのがわかる。でもそこに居たら食われるかもしれないのにわからない――パートナーとやらだからだろうか？

立ちふさがっているピョコモンの体が光だした。黄色い亀が心なしか怯んだような気がする。

「ピョコモン進化、ピヨモン！」

光に包まれたあと出てきたのは、ピンク色の体に蒼い目、羽の先には爪のようなものがあり、頭にはクルリと丸まった青とピンクの何か、一言で表すならばピンク色の鳥といった感じだった。

「マジカルファイヤー！」

その嘴から緑色の炎が渦を巻いて吐き出される。少し声と炎を同時に出せるのを疑問に思ったが、そういうものなのだろうと思うことにした。

黄色い亀、のとがった甲羅に当たりはしたが焦げるわけでも黄色い亀が炎に包まれるわけでもなく、黄色い亀は怯みさえせずピヨモン

を噛み砕こうと――――

「がぁぁぁあああぁぁぁあああ」

ザクッ

ぶちゅっぶちっ

嫌な音が支配して

気がついたら――

自分の右腕の肉が削げてて

血が体を汚して

血が温かくて、

ピヨモンの蒼い目が怯えていた。

ピヨモンの口が動いて

「うぁぁあぁぁあ」

例えようもない痛みが襲ってきた。

しかし現状が打破されたわけではないから――

逃げる策を考えなければならなかった。

持っているのは睡眠薬の粉二袋、突飛ばした時に着いたのだろうピヨモンの羽、靴だけだった。

これらの材料から逃げる策を考えなければならない――――

第二話二つの世界（後書き）

一話で自殺で二話で大怪我、いじめたい訳じゃないんですm（＿）m

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4572ba/

atonement

2012年1月13日16時47分発行